

## *Cousin Phillis* における Phillis と Paul の成長

越 川 菜穂子

### (1)

*Cousin Phillis* は、“It is a great thing for a lad when he is first turned into the independence of lodgings.”<sup>1</sup> と書き出されている。語り手のポール (Paul) が下宿生活を a great thing と語っているところに、親から巣立っていく青年の引き締まった気持ちが窺える。同じ十七歳のときに家族から巣立つという、二人の自立がテーマになっていると考えてよい。だからこの小説では、主人公フィリス (Phillis) の自立への経過と並行して語られるポールの成長期の心理にも注目すべきである。もっとも、ポールのほうは “I now began to taste with relish the pleasure of being my own master.” (260) という具合で自立が順調だが、フィリスは失恋という苦しい試練をくぐって自立を果たす。

二人はどちらも独りっ子で、よい両親のもとで育ち、性格の繊細さも似通っている。ポールの父は、“Spare the rod, and spoil the child.” という教育方針で臨んでいるつもりなのに、息子は母のほうが厳しかったと感じている。よい父母は子どもにこのように実感されるものなのかもしれない。ポールは、母が自分の “boyish faults ” (260) に苛立っていたからだと理解している。ポールの両親と同じくフィリスの両親も仲のよい夫婦であった。父のホールマン (Holman) が外出から帰ってきたときの “...it was her regular plan to give him his welcome home — by a look, by a touch, nothing more — as soon as she could after his return, and he had missed her now. Regardless of my presence, he went over the day's doings to her.” (274) というポールの観察に、心が通い合った夫婦の仲のよさが窺える。

このように、類似の家庭環境で育ってきたポールとフィリスであるが、父親から溺愛されたことがフィリスの親離れを命がけの苦しいものにする。息子の父親

はわが子の自立を単純に望むから話は簡単だが、娘の父は、ことに彼女が可憐であれば、自立を妨げる心理が働く。*Cousin Phillis* は、単純に言ってしまえば娘の自立をめぐる父親の戸惑いを語った小説だということになる。

## (2)

ポールが外来者としてヒースブリッジに滞在しホールマン牧師の家族のことを語るのは、*Cranford* でメアリ・スミス (Mary Smith) がミス・マティ (Miss Matty) の家に滞在して克蘭フォードの人たちの様子を語るのと同じである。ポールはホープファームにおける牧師たちの生活を “his circumscribed life” (326) と呼んでいるし、ホールマンは娘が恋をしていたことを知ったときに “...you would have left us, left your home, left your father and your mother, and gone away with this stranger, wandering over the world.” (346) と言って憤る。この言葉には閉鎖された村、わが家という気持ちが強く感じられる。この閉鎖性も、*Cranford* に似通っている。けれども *Cousin Phillis* は、性格の創造という点で十年前に書かれた *Cranford* よりもはるかに優れている。小説の主要な人物たちは善人ばかりであるが、よい性格に必然的に潜在する欠点が主人公に影響し、彼女を苦境に追い込むという展開になっている。作中人物が単純な型に収められていず、個性をもつ個人として描かれているのである。

たとえば Edgar Wright は、ギャスケルが、男性にありがちな欠点をホールマンに付与し、“intensely individual and human portraits”<sup>2</sup> を創造していると評価している。主要な人物たちはこのように作者の鋭い眼をくぐりぬけているから、その心理や行動には現実味がある。Hopkins はこの作品を、“*Cousin Phillis*, like *Cranford*, has a flavour all its own. It has the delicate charm of the earlier story, and yet it strikes, if anything, a deeper note. What impresses the reader first about this novel is its restraint.”<sup>3</sup> と批評している。この批評が指摘しているように、伝えたいことを抑制して読者の想像力に委ねる作者の余裕が、作品に深みを加えているように感じられる。

## (3)

ホールマンは気取りがなく農夫たちとも親しくつきあうが、農作業が捗らない

ときには憤るし、困難な状況に陥るとやや不当な判断に傾くこともある。彼はホールズワース (Holdsworth) について “...there is a want of seriousness in his talks at times, but, at the same time, it is wonderful to listen to him!” (305) と語る。ホールズワースは耳に心地よい表現を選ぶ才能があり話術で相手を魅了するけれども、誠意が欠けていることをホールマンは感じ取り警戒している。彼は、後にポールから聞かされる、ホールズワースのフィリスに対する愛についても、相手が若い女性であれば誰にでも向けられる愛情にすぎない考える。このあたりには、娘の父親という立場と牧師という職業からくる頑さが感じられる。

彼は妻や娘にはやさしいが、人の心の動きを理解する点では彼女たちに劣る。ある雨の降る休日に、娘の恋の苦悩に気づいていないホールマンが家族に Virgil を読み聴かせているとき、フィリスが心痛を抑えきれないで “unusual spurt of temper” (335) を起こして縫い物の糸を切ってしまう。そのとき、ホールマン夫人は機転を利かせて娘の不機嫌を夫に気づかせまいとする。娘は感謝して、こっそりと母の手を握る。この様子を見ていたポールは、心のなかで夫人を “good mother!” (335) と称賛している。また、父親に咎められて娘が卒倒したとき、父親はなす術もなくよろめいて椅子に腰を下ろしてしまうが、母親のほうは娘に手際よく手当てを講じる。こういう彼女のことをポールは、“purely motherly woman” (310) と説明している。こうした場面では、ホールマンはやさしくはあるが敏感さには欠けている。

夫人は知識面では夫や娘に敵わないが、家族のなかでの発言権は保持している。彼女は、生活面においては夫よりももの分かりがよい。彼女は夫が自分を信じてくれているという自信があるから、控えめではあるけれども主張はする。また、身の周りのことについても的確な洞察力をもっている。たとえば彼女は、フィリスの美しさが村の男たちに刺激を与えていることにも気づいているが、夫のほうは気づいていないようである。

小説の終わりで、ホールマンは病床の娘にリボンを渡すが、娘はそれを喜ばなくなっている。読者はこのことによって、彼女が成長したことを知る。けれども、父親ホールマンはこのことに気づかないままである。彼が娘の成長を認識したことを示す叙述は作中にはない。Shelagh Hunter は “During her illness the family re-forms itself in the light of the Minister's recognition of Phillis's capacity for

action springing mature feeling.”<sup>4</sup> と批評しているが、娘が心理面で成長したことに父親が気づいているとは考えがたい。フィリスとポールが苦悩によって精神面で成長したのと対照的に、ホールズワースは苦悩したにもかかわらず、成長はしないままで小説は終わってしまっている。彼がフィリスを成熟した女性として見られるようになるのは、彼女がポールの両親の家での滞在を終え、帰宅してからのことになるだろう。

#### (4)

ホールズワースはカナダへ去るまでフィリスに愛を打ち明けてはいない。だから、彼女を欺いたとは言い切れない。A. B. Hopkins はホールズワースを創造した作者について、“The character of Holdsworth was drawn by one who knew how much mischief can be done by the impact of a shallow nature on a deeply serious one.”<sup>5</sup> と書いている。これは、性格が引き起こす悲劇についての見事な説明である。ホールズワースが不誠実でなかったことは、彼がカナダから結婚披露の案内状をホープファームへよこしたことが証明している。彼はポールに、“How one's thought change...” (315) と語る。ホールズワースのような人間は、新しい刺激を受けると往々にして古い印象を忘れ去る。語り手はこのことをよく理解していて、“Phillis had faded away to one among several 'kind friends'.” (331) と語っている。

また、フィリスが異性に目覚めるのは避けられないことである。彼女は家族とだけで生活してきて俗世間を知らないが、教養がある。彼女は初めのころポールに、ホールズワースのことを “But is he not very like a foreigner?” (300) と尋ねたあと、“I like an Englishman to look like an Englishman.” (300) と言っている。けれども、彼女は彼によって、Horace や Virgil の世界へ案内される。リジー・リー (Lizzie Leigh) のように無知な少女が粗野な若者の誘惑に負けるのとは事情が違う。彼女の教養は、知識人であるホールズワースに心を惹かれていった原因のひとつに数えられるだろう。

閉ざされた平和な家族のなかに外来者が入ってきて、未知のものを見せてくれる。フィリスはそれに好奇心をもつ。干草づくりやリンゴ摘みや家事や編み物、といった牧歌的な家族生活のなかへ魅力のある技術者が入ってきて、Horace や

Virgil だけではなく恋の歓喜を教える。これは危機であるが、娘が自立する転機でもあった。彼は決して悪漢ではない。大胆なことを言えば、カナダでの仕事が舞い込んでさえこなかったら、恋は実っていたかもしれない。偶然が彼女を弄んだと言える。

けれども闖入者が再訪する心配はなくなり、フィリスは立ち直ろうとしているから、ホールマン一家はもとの平穏な家族生活に帰ることになるだろう。

#### (5)

この小説では、主人公のフィリスよりも語り手ポールの心理の経過のほうが、私には興味深く感じられる。ホールズワースからきいた彼女への愛の告白を伝えてしまったことによるポールの苦悩の推移のほうが、作品を盛りあげているように思える。失恋はフィリスにとって大きな衝撃ではあるが、ポールの苦しみは性格の裏づけがあるので迫真的である。ホールマンがポールを問い詰めている部屋へフィリスが入ってきて三人が話し合う場面で小説が終わっていても、読者に未完という印象はあたえないのではないか。ここでポールは、他人への思いやりを実らせることの難しさを思い知りおそらくホールマンよりも思慮深い人物になったのであり、だから小説の結末ではフィリスが彼に庇護を求めることになるのである。

ポールには、注目すべき点が二つある。一つは、熱心な Christian ではないという点である。彼は、“I did not take kindly to ministers.” (268) と語ったり、フィリスと話している最中に “...she would have led me into a conversation on the right ends of prayer.” (326-7) と案じたりしている。これは、“Hand and Heart” の Tom などと対照的である。そして二つめの注目点は、若いけれども情熱的でないということである。これは多分、彼が熱心なキリスト教信者にならなくてすんだ原因でもあっただろう。こんな性格であったから、彼はフィリスへの親愛の情を恋には発展させないで、他の女性と結婚した。だから彼は、ホールマンの家族やホールズワースについての回想を読者に語ることができたのである。

彼は小説の初めのほうで少年時代の母を回想して、“...perhaps my boyish faults annoyed her more...” (260) と語っているが、この「子どもっぽい欠点」の一つとして彼が自覚しているのが軽率さであり、この自覚はフィリスの心を傷つ

けた大失策によって彼の内部に深く刻み込まれることになる。

ポールは、繊細な感性をもつ青年である。たとえば、ホールズワースとの会話でラテン語を忘れてしまって恥ずかしい思いをしたり、鉄軌道に関する亡父の発明を自慢してホールマンにたしなめられて恥じ入ったりする。フィリスにパイの皮をつくる仕事を手伝おうと申し出て、“Oh, yes; not that you can help at all, but I like to have you with me” (283)と言われるが、彼女よりも背が低く、知識も劣っているために、恋人になる資格はないと自覚している。彼は感受性が豊かで、ホールマンが娘と書物についての話をしていて妻が話に加われないでいるのに気づき、話題を打ち切って妻のほうに話しかけるのを観察し、ホールマンと妻との双方の気持ちの動きを敏感に読み取って読者に伝える。若いけれども、周囲の人たちの性格や気持ちをよく見抜いている。彼はこういった細やかな感性を通して、フィリスと彼女を取り巻く人たちを見つめ続ける。フィリスが少しずつ大人の女へと変わっていくさまを、彼女の服装の変化から感じ取る。それから、ホールズワースの言葉をフィリスに話してしまったことに心を痛め、彼女を気遣い続ける。ポールは彼女に同情を寄せつつ彼女の心理の推移を語ることによって、軽率な行為を悔やむ自分と、娘の恋愛が容認できない頑ななホールマンとの判断のちがいを鮮明に読者に印象づけていく。たとえば、ホールズワースのことを打ち明けたときに激怒するホールマンについて、語り手は “...the minister spoke and thought of her now, as a child, whose innocent peace I had spoiled by vain and foolish talk. I knew that the truth was different.” (345) と語っている。ここには、現実に対する青年の目の確かさが、目を閉じたままのホールマンの頑さと対比されている。

ポールはまた誠実な青年で、自分の軽率な行動について潔くホールマンに告白し、それを聞いたホールマンが責任の大部分をポールにかぶせ激怒する姿をみても弁解は一切しない。ホールズワースから彼女を愛していると打ち明けられたとき、彼はホールズワースのやや気取った態度が少し不愉快だったので自分が返事をしなかったことを後で思い出す。不愉快に感じたのは、ホールズワースの言葉にわずかながら不誠実さを感じ取ったからだろう。ポールがホールズワースの言葉をフィリスに打ち明けるのは、彼女が意気消沈しているのをみて元気づけたいからであって、嘘をついたわけではないから、全く軽率であったとは言い切れな

い。その場その場に応じて、彼は誠実な判断をしているのである。

彼の失策がフィリスへの思いやりから起きたこと、この出来事が彼女を成長させたことを思えば、彼の失策は許されるのではないだろうか。A. W. Ward は彼を弁護して、“...his ‘tactical’ blunder in revealing to her Holdsworth’s affection is so perfectly consistent with his sympathetic point of view as to be altogether excusable.”<sup>6</sup> と述べている。読者としてポールに同情を禁じえないのは、繊細でやさしい感性のゆえに、誠実な性格なのにホールマンに嘘をつかなければならなかった点に対してである。

#### (6)

ホールマンは妻を愛してはいるが、彼女に知性面での不足を感じ、気の毒に思っていた。それで、娘の教育には力を注いだ。フィリスはそれによって母とはちがった人格を形成していく。けれども、彼女は母による教育を求める気持ちを潜在させていたかもしれない。そして、それは必要なことでもあった。父の権威が支配するホールマン家は、父母の均衡のとれた感化のもとで娘が育つという正常な家庭環境ではなかった。そのために、一見申し分がないような家庭環境のなかで、娘は息が詰まるような思いをしている。

ポールは、フィリスの幸福そうな様子を次のように語っている。

...I can see her now, standing under the budding branches of the grey trees, over which a tinge of green seemed to be deepening day after day, her sun-bonnet fallen back on her neck, her hands full of delicate wood-flowers, quite unconscious of my gaze, but intent on sweet mockery of some bird in neighbouring bush or tree. She had the art of warbling, and replying to the notes of different birds, and knew their song, their habits and ways, more accurately than any one else I ever knew. (327)

このように、まるで牧歌のなかの乙女のような娘を、ホールマンは溺愛した。彼女がヒースブリッジの村の人々と一度も接触しないことによって、娘をどれほど大切にしていたかがわかる。自給自足に近い暮らしをしている家庭で親に所有された子どもは家の外での体験を制限され、その結果、家族外の人たちと接触



することに関して親への裏切りのような申し訳なさを感じ、その罪責感を無意識の領域へ追いやるのではないか。フィリスがホールズワースのことを親たちとの談話で話題にしないのも、そのような心理によるのであろう。

Wright は、フィリスに対するホールマンの教育の偏りをも指摘している。

...Phillis is what she is because her father was there to guide and teach her, yet as Paul shrewdly realizes there has been a weakness in the upbringing which has made it easier for events to take their shape, and for which Holman is responsible. There has been this time an excess of care.<sup>7</sup>

この解釈のように、父親の過保護がフィリスの不幸の一因である。ホールマンは無意識のうちに、彼女を子どものまま自分の手もとに置いておきたいという望みを抱き、娘が肉体の成熟にともなって精神面で成長することを望まなくなっている。だから、ホールズワースが自分とは対照的な性格であることには気づいて何かしら危険を感じていながら、フィリスの苦悩の原因についてはなかなか見抜くことができなかった。そして、ポールがホールズワースの言葉を安易にフィリスに告げ、彼女に期待を持たせた軽率な行為の告白を聞かされたとき、子どもの耳に恋や結婚の話を注ぎ込むなんてけしからんと怒鳴る。彼は娘を溺愛するあまり、娘の自我の確立を許せなくなっている。これでは、成熟するに従って父親は娘が信じられなくなり、娘もまた父親を信用できなくなる。ポールの非はホールズワースの言葉をフィリスに伝えたことであるのに、彼はむしろ娘に色恋の話をしたことを憤っている。彼は、娘の成長という事実直面して衝撃を受けているのである。フィリスは、知性の発達だけは促されていたから、身体の成熟と精神面での成長との不均衡による苦悩は大きかった。父の影響でフィリスの発達は一面的な面に偏り、恋愛には無防備のままであった。

#### (7)

フィリスが健気に自立していく兆候は、ホールズワースからきた手紙をポールが彼女に読ませる場面からみられるようになる。彼女は彼に、あなたは何も悪いことはしていないと言う。次に彼女は、ポールがホールマンに問い詰められて自



分の失策を告白している部屋へ入って行ってポールをかばう。それによりこれまでの経過を理解できたので、誠実な性格のホールマンはポールを厳しく咎めすぎたことを謝罪する。これらはすべてフィリスの自立への過程である。

フィリスはポールに、彼の両親の家で二か月ほど静養させてほしいと頼み、健気にも最後には“Only for a short time, Paul. Then—we will go back to the peace of the old days. I know we shall; I can and I will!” (354) と決意を語る。この言葉によって読者は、フィリスがホールズワースに出会うまでの心静かな暮らしに戻るだろうと予測できる。この点について、矢次綾氏は次のように適切な解釈をしている。

リボンを脇にやりながら、無意識のうちに態度で示したように、フィリスは、それまでのように父の影響を受けるのではなく、独りで自分のやるべきことを模索する決意をしている。要するに、‘will go back’ と ‘shall’ の複数形の主語は対照的な、単数形の ‘can’ と ‘will’ の主語に、親と精神的な訣別の意志を込めている。失恋の衝撃によってフィリスは成長し、親から独り立ちをしたのである。<sup>8</sup>

フィリスは苦悩の体験によって成長し、平穏な生活のなかでいっそう心豊かな生活を送ることになるだろう。“the peace of the old days” は昔の親子三人の平穏な暮らしに帰るという意味ではなく、父と対等な家族の一員として平穏な暮らしに還るという意思の表明である。Hunter が、“It is Phillis who carries the sense of active possibility in this timeless world. It is also, of course, Phillis who activates the renewal of old patterns at the end.”<sup>9</sup> と批評しているように、ヒースブリッジのホープファームは timeless world であっても、フィリスは変わったのである。

多くの読者は、ポールとフィリスとの結婚を予測あるいは期待しながら読むだろうが、作者はそのような希望的な結末を選択しなかった。この物語を回想として語るポールは、すでに別な女性と結婚していることを打ち明けている。作者は、まだ成長の途上にあった二人がさまざまな苦悩を経験して異性をみる目を養ったうえでそれぞれ自分に相応しい相手を見つけて結婚した、ということを暗示しているのだと解釈してよい。二人を結婚させるのは物語としてのおさまりはい

いが、甘い結末になる。この作品の結末は、フィリスやポールの行く末を読者の想像に委ねたままで、作者が立ち去っていくという感じがする。フィリスの両親、ことに父は、現実の娘を幻影化してみようとし通しだったけれども、ポールは成長していくフィリスをありのままに受け入れていた。彼だけがフィリスを個性のある娘としてやさしい眼差しで見続けていたのである。“The old days”という言葉に拘泥すれば少女時代への感傷的な退却のように取れないことはないが、これは Hopkins が批評しているように、彼女が自己憐憫なしに (“without a shade of conscious piety or self-pity”<sup>10</sup>)、これまでと同じ生活環境にあっても、精神的には両親から自立しようとする決意を読み取るべきである。この “we shall” という言葉は、フィリス本人はもちろん、彼女の周囲の人たちに、あるいは読者にも呼びかけている作者の言葉だと理解できるだろう。

#### 注

1. Gaskell, Elizabeth, *Cousin Phillis and Other Tales* (Oxford: Oxford UP, 1981), p.259. テキストからの引用はこの版を用い、以後、頁数を本文中の括弧内に記す。
2. Wright, Edgar, *Mrs. Gaskell: The Basis of Reassessment* (Oxford: Oxford UP, 1965), p.202.
3. Hopkins, A.B., *Elizabeth Gaskell: Her Life and Work* (London: J. Lehman, 1952.), p.273.
4. Hunter, Shelagh, *Victorian Idyllic Fiction: Pastoral Strategies* (London: Macmillan, 1984), p.102.
5. Hopkins, p.275.
6. Ward, A.W. (Introduction), *The Works of Elizabeth Gaskell vol.7* (New York: AMS, 1972), p.xvii.
7. Wright, p.203.
8. 矢次綾「従妹フィリス」、松岡光治編『ギヤスケルの文学』、英宝社、2001、pp.212-13
9. Hunter, p.102.
10. Hopkins, p.273.